

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第二号
平成二十八年三月一日発行（抜刷）

講演

平成二十六年年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会

（平成二十六年六月十二日 於四号館 四三一教室）

荷田春満と「荷田派」の国学者

松本久史

平成二十六年年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会

(平成二十六年六月十二日 於四号館 四三一教室)

荷田春満と「荷田派」の国学者

松 本 久 史

【岡野友彦】 本日は、平成二十六年年度神道研究所公開学術講演会を開催いたしましたところ、多数の方々がお来場くださり、誠にありがとうございます。今回の講演会は、國學院大學神道文化学部の松本久史先生をお招き致しました。皇學館

大学の皇学と國學院大學の国学は、同じであるかどうかの議論はあるかと思いません。私どもは基本的に同じであると思っております。その国学者の始まりは、契沖を入れるかどうかの議論もあるかと思いますが、今日は荷田春満についてのお話をさせていただきます。荷田春満につきましては、松本先生は第一人者と申上げてよろしいかと思えます。ここで松本先生の簡単なご紹介をさせていただきます。松本久史先生は、昭和四十二年に栃木県に御生まれになり、國學院大學文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学なされ、その後、博士（神道学）の学位をお取りになりました。國學院大學日本文化研究所の助手、同専任講師、國學院大學研究開発推進機構准教授を経て、現在は國學院大學神道文化学部准教授をおつとめです。ご専門は国学史・神道史です。主要業績は、主なものだけをご紹介いたしますと、『新編 荷田春満全集』第一巻・第二巻、『荷田春満の国史と神道史』など、その他多数の業績がございます。本日は荷田春満と荷田派の国学者、荷田春満に関する第一人者である松本先生のお話をお伺いできるとい

とですので、皆さんどうぞ、最後までご清聴いただきたいと思います。簡単ではございますが、開会のご挨拶とさせていただきます。

【松本久史】 皆様こんにちは。國學院大學の松本久史でございます。ただいまご紹介いただきました通り、国学、特に荷田春満を中心に研究しております。「国学」と「皇学」の違いという大きな問題がありますが、本日は、ほぼ同意義だとして理解いただければ結構かと思えます。

国学を考えますと、伊勢という土地柄から、やはり本居宣長という人物を皆さんは思い浮かべるかもしれません。本居宣長の業績は非常に偉大です。そして、本居宣長以降に、国学は学問として非常に成熟したものとなり、それが幕末・近代に影響を与えたというのは、皆さんご承知のことかと思えます。

いわゆる「国学の四大人」と称される人物は、荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤の四名の国学者でありました。その中で国学の始祖と称されている荷田春満という学者がいますが、名前だけは聞いたことがあるかと思えます。高校の日本史などでも、荷田春満という名前が載っていたりします。ただし、荷田春満が何をした人物なのかとなりますと、殆どの方がご存知ないかと思えます。今回、

その春満の学問の一端をご紹介申し上げるとというのが目的であり、日本の歴史の中で荷田春満の学問というのは、何であったのかという位置付け、意義付けをご説明申し上げたいと思います。

国学者の話などをいたしますと、ややもすれば個別の学者の伝記に終始してしまふ傾向があります。例えば、この人はこのような事をしました、何年に生まれて何年に亡くなりました、ということと終わってしまい勝ちであります。そうではなくて、やはり近世の歴史の中で、国学という学問がどのように位置付けられるのか、ということをお話したいと思っております。本日のテーマには春満だけではなく、「荷田派」の国学者」と付けておきました。荷田春満のこと自体がよくわからないのに、さらに「荷田派」というと、もっとわかりにくくなってしまふのですが、実は、これも意外と日本の歴史の中にしっかりと位置付けている、ということをご理解いただきたいと思えます。そのようなことを通じて、「国学」とか「皇学」と呼ばれる、いわゆる日本を知る学問、日本の心、道を知る学問、と言ったものが近世以来今日に至るまで、どのように続いているのかということまでを、皆さん方にも考えて頂ければ良いなと思えます。

一 『創学校啓』を読み直す

荷田春満というと真つ先に、『創学校啓』が思い浮かびます。この中で『創学校啓』自体を初めて知ったという方もいらっしゃると思いますが、従来あまり注目されていない部分でもある、冒頭の箇所をお話ししながら進めていきたいと思えます。

まず、冒頭の標題は、「謹んで鴻慈を蒙り国学校を創造せんことを請ふ啓」となっておりますが、これは実は春満没後の寛政十年に刊本として出版された際の標題になります。『創学校啓』は通称であって、正式なタイトルではありません。京

都の伏見稻荷大社に隣接している、東丸神社という荷田春満を御祭神とする神社に、この原稿にあたる草稿本があります。同社にはその他にも、関係資料が数千点所蔵されています。

【写真1】を見ていただければわかりますが、これが東丸神社にある草稿本の冒頭の標題部分ですが、実は破損して、良く分からないのです。人偏があつて、その右が欠けています。次の文字も欠けていますが、どうもこれは学校の「学」のように見えます、これは分かりますね。上の部分は何字分かが欠損しており、次に人偏が見え、「学校啓」と続きます。これが本来の草稿本であり、「国学」という風に後の刊本には書かれています。草稿本においては、どうもこれは『魏志倭人伝』の「倭」ですから、「倭学」であつたと思われれます。

【写真1】（新編 荷田春満全集」第十二巻 おうふう 平成二十二年 より）



実は『創学校啓』の草稿本は、他の部分でも、人偏の「倭」という字を使つていまして、推定するに冒頭部は、「倭学」だろうとされています。草稿本の段階では、実は「国学」ではなく、「倭学」であつたという事が分かっているわけです。これは何を意味するかという話ですが、おそらくこの「倭」というのは、「倭」と「漢」を対比したものなのです。よく和洋折衷とか言いますよね。倭魂・漢才とかそういう対比で使うものです。

研究を幕府から依頼され、翌八年に幕府に献上された古書の真偽判定をした『和書真偽考』というものを著します。こういった歴史的事実があり、『創学校啓』の前半部分にはそういった事情が書かれているようなのです。つまりは、単なるレトリックではない、という事になります。

二 「三哲」「四大人」説の誤謬

荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤、これら四名は「四大人」と呼ばれる国学者たちです。岡野先生の御紹介の所でもありましたが、春満という人以前に、大坂に契沖という真言宗のお坊さんがおりまして、その方が『万葉集』の研究を進め、『万葉代匠記』という画期的な注釈書があります。本格的に日本の古典に対して文献実証的に研究する方法を取り始めた人です。

近世を通じて、国学や和学などと呼ばれた日本固有の文化や伝統、信仰を研究する学問に、どういう学統、つまり学問の系統があるのかという議論が長い間ありました。「三哲」説では、三人の人物があげられ、最初に契沖、次に真淵、宣長というように数えます。近世を通じてそういう認識が主流であったが、幕末になると平田派、つまり篤胤の門人達が、契沖を除外して春満および篤胤を足して四人にして、「四大人」説になったという見方が国学の系統論にはあります。しかし、本当にそうだったという実証はされていないように思われます。私は結論的にそうではないという立場をとっています。

松浦光修先生が御専門ですが、大國隆正の『学統弁論』という著述には、契沖は歌書にかぎりれる古学にて、春満先生は、それをもて、神典にさかのぼられしにより、これをもて我古道学の初祖とあふぎたてまつることになん（『学統弁論』日本思想大系五〇『平田篤胤 伴信友 大國隆正』岩波書店 昭和四十八年）、

と、書かれています。この本は幕末の安政期に出ますが、この頃に、契沖を除いて春満を最初にするというような考え方が現れたのだ、とするのが現在の通説です。大國隆正という人は、篤胤の門人でありまして、そういったことを幕末の平田派が言いだした、ということになります。

さらに、「四大人」説というのは近世の実情を示していない、という有力な反対意見があります。三宅清という、戦前に荷田春満を一番研究した学者です。その方が、「春満の研究は大したことが無いんだ」という趣旨の事を言ってしまったのです。春満の学問内容にはオリジナリティはなく、たまたま良いものが有っても全部契沖の剽窃で、今風の言葉でいえば、いわゆる「パクリ」であると断定したのです。三宅清という人は、春満研究の第一人者だったので、その影響で「ああそうだったのか」という認識を持った研究者も多く、春満の研究というのは戦後、非常に停滞してしまっただけです。

平成十四年から、國學院大學の創立百二十周年記念事業で春満の全集を作りました。その過程で、東丸神社の史料が、戦後では初めて研究者に閲覧が許され、平成二十二年には全十二巻の刊行が完結しました。三宅先生が戦前研究されて以降、戦後五十年以上停滞していた、といえると思います。三宅説はスタンダードとしての地位を占めており、近世の学者の水準において「春満という人物は大した人じゃなくて、「四大人」に入れるのは適当でないのではないか」という考え方がずっとありました。

ただし、本当にそうなのだろうか。虚心坦懐に考えてみようと思っていたわけです。具体的にどうなのか、同時代資料で見たいうえで判断するべきであった、篤胤以前はどう認識されていたのか、それを見なければならぬと、考えたのです。

まずは、『近世畸人伝』という資料です。この「畸人」というのは、今の奇人変人の「奇人」ではなく、特異な能力のある人、という意味です。奇人ということ

マイナスイメージですが、これはプラスの意味です。そういう人々の評伝を集めた『近世畸人伝』という本が寛政二年に刊行されました。伴蒿蹊という、近江国出身で、主に京都で活躍した国学者が著者ですが、この『近世畸人伝』の中で、春満を取り上げて項目を立てています。

契沖は仏者なるうへに、其人綿密に過て泥滞せるものもま、見ゆるを、此翁は一層登りて説をたつ。およそ元禄年間には諸道復古の運にあたりたる時にして、国学を唱ふるは契師と此翁なり（中野三敏校注『近世畸人伝』中央公論新社 平成十七年）

と、あります。この中の「此翁」は荷田春満の事です。ここで、「国学」と言っていることに注目して下さい。『創学校啓』が刊行されたのは寛政十年で、この本よりも八年後です。先ほど取り上げた『創学校啓』の資料は、刊本ですが、それ以前の寛政のはじめ頃には、既に「国学」という言い方があって、春満の学問は「国学」なんだ、という事を伴蒿蹊が主張していることを示しています。春満と契沖を共に国学の祖として認識しているというのが、寛政初期における伴蒿蹊の認識です。

因みに、『近世畸人伝』においては、春満が、「国学の学校を京師に開んとて」と記述されており、これによって春満が京都に国学の学校を建てようとしていたという事が、初めて公になりました。『近世畸人伝』は、結構売れています。本書が出版され普及していくことにより、春満という人物が次第に一般に認知されていきました。『近世畸人伝』は、後世に大きな影響を与えた本なのですが、どうやら春満についての情報は、伏見の稻荷社に荷田一族が社家であり、伴蒿蹊はそこから情報を仕入れていたと推測できます。これは後で詳しく説明します。次に、賀茂真淵とその周辺の春満理解を考えてみます。春満の直弟子の真淵が、春満をどう思っているか、という点も重要です。

傍証資料として、龍公美と賀茂真淵の問答を記した『龍公美賀茂真淵問ひ答へ』

荷田春満と「荷田派」の国学者（松本）

があります。龍公美は近江彦根の人で、主には儒者と言われていますが、和歌にも造詣の深い人物です。賀茂真淵と文通をして問答を交わしているのが、宝暦十年の事です。「斎先生はたれによりて学び給ひしにや独得の見識にて侍るや実に千古一人と甚感服し侍り」という質問をしているように、龍公美は斎先生（春満）を認識しています。これは、斎という人物はどういった人なのか、なかなか学識のある学者だ、と春満の門人たる真淵に質問しているわけです。宝暦年間の段階で、春満はまったく無名であったわけではない。後に詳しく説明しますが、おそらく京都周辺の荷田派というのが、活動していて、そこから情報が出ているのであろうと思われます。

真淵本人の認識ではありますが、『神代紀葦牙』（文政二年刊）という、『日本書紀』神代巻の注釈書があります。著者の栗田土満という人は、遠江国の神職で、賀茂真淵と本居宣長の二人に学んだ人です。ここでは、

土満故翁のもとにありし時、故翁のいはれけるハ、おのれが今いふことハ、皆荷田ノ大人のいはれたることく也。さるをかの大人の時いまだかゝることを信用人なかりし故、おもてにたて、ハいはれず、おのれにのみひそかにつたへられしとぞいはれし。（栗田土満 『神代紀葦牙』上巻）

と書かれています。「故翁」は真淵の事です。これは頭注の所に書かれています。本文では、宣長先生が『古事記伝』を著して、日本の真の道を明らかにしたが、未だそれを信用する人は少ない、と記されていますが、それに補足した箇所です。宣長の前に、古典に基づいて古道を提唱した人物は真淵であって、実は荷田春満の教えだったのだ、という事を真淵が晩年述懐していた、と土満は主張しています。真淵晩年の述懐ですから、だいたい明和年間の頃にあたり、真淵は「五意考」を著す等、日本の古道を明らかにしようとして盛んに執筆している段階です。古道の考え方は、元々は春満のものだと真淵は言っていると理解できます。この土満の指摘は、非常に重要ではないかと思えます。

次は宣長の認識についてです。国学入門の性格を持つ、『うひ山ぶみ』(寛政十一年刊)に書かれています。それには、

契沖ほふし、歌書に限りてはあれど、此道すぢを開きそめたり、此人をぞ、此まなびのはじめの祖ともいひつべき、次にいさ、かおかれて羽倉大人、荷田東麻呂宿祿と申せしは、歌書のみならず、すべての古書にわたりて、此ころばへを立給へりき」(『うひ山ぶみ』『本居宣長全集』第一巻 筑摩書房 昭和四十三年)

と、あります。この通り、宣長も春満を全く無視しているわけではありませんし、契沖の次は真淵だとは一切言っておらず、荷田春満も尊重しています。ただ、同時に契沖も排除していないという事にも注意して下さい。契沖、春満が居て、真淵に継承されていく、というような認識を宣長は持っていたようです。

以上のように、篤胤以前、荷田春満は古学の祖、若しくはそれに準ずるような形で、契沖と共に位置付けられていたという事が、同時代的な資料の中ではっきりと認識することができます。

篤胤以降の幕末期であります。次のような資料があります。本居内遠は、宣長の孫にあたり、本居宗家を継いだ人物です。その人の認識です。

水戸の二世の黄門卿、万葉集の御積種々の古書の校正、別して大日本史礼儀類典などの御著述ありて、其事にあづかれる学者たち又、歌学に限りてはあれど、浪花円珠庵の契沖阿闍梨など、其端をなしたれども、其後も山崎垂加流の神道の学行はれしを、京稻荷山の神職羽倉斎宮荷田東麻呂、専儒仏意を離れて学道を立て、夫より遠江国賀茂社司の一族なる岡部衛士賀茂真淵、田安公に召れて江戸に出、専古書を解説して著書数多に古意をのへ弘め候、私祖父本居中衛宣長も自憤発して世上の学道混雑の流弊を改正せむと、古書の意により古事記伝の著述を志し候」(『古学本教大意』嘉永七年成立、『本居宣長全集』第十二巻 吉川弘文館 昭和二年増訂再版 適宜読点を付した)

と、あります。契沖の事にも言及しており、加えて大事なのは、「水戸の二世の黄門卿」にも触れていることです。今日の本題とは若干ずれますので、詳しくは話しませんが、国学の形成には吉宗のみならず、水戸の徳川光圀の文化事業も非常に大きな影響を持っていると思われまます。学統に対する内遠の認識は、契沖から春満、そして真淵、宣長、という流れを尊重しています。この点は大変興味深く、本居宗家の三代目としての内遠は、篤胤は入れていませんが、契沖を除くと春満を入れるとかの出し入れはしていません。契沖と春満は両方居るのだとしているのです。

以上のことから、「三哲」が近世における主流の学統意識であって、幕末維新期に「四大人」に取って代わられた、というような通説は極めて疑わしいと考えられます。

【写真2】は、荷田春満のお墓です。二メートルはある立派な自然石ですが、この石碑は明治四年に平田派によって建てられました。元々の近世のお墓は小さいもので、一メートルあるかないかの質素なお墓でした。大きなものを平田派が建てたのも相まって、「四大人」説はとも平田派が捏造したのでは、というイメージに繋がったようです。

もう一つ面白いものがあって、【写真3】『落葉の錦』という歌文集があります。これも内遠が嘉永四年に刊行している、いわゆる、和学・国学の先人の歌などを集めたもので、本居宣長が亡くなって五十年経つ事を記念して纏めた本です。その中の挿絵で、六人が並んでいます。「和歌六歌仙」に準えて、国学六歌仙とも言いましょうか、荷田春満・契沖・下河辺長流・春満の姪である荷田民子・真淵・宣長がいます。お坊さんが居て、女性がいる、という六歌仙を模したもので、ちよつと面白いものです。これにも端的に示されるように、鈴屋派でも荷田春満を特別排除して、契沖に直接繋がるのだ、と思っっていたわけでは無く、むしろ、学統としては契沖、春満、真淵、宣長という流れで考えられていたようです。「四

大人」説を巡る本質的な問題は、篤胤の取り扱いであって、春満ではないと私は考えています。近世を通じて、春満は学統の根本として認識されているのではないかと、いろいろな説が飛び交っていますが、この様に理解した方が良いのではないのでしょうか。そういった意味でも、近世、同時代的にも荷田春満は認識されていたという事実を皆さんに理解して頂ければと思います。

【写真2】



荷田春満と「荷田派」の国学者（松本）

【写真3】



三 『創学校啓』に見る春満の学問

次に、『創学校啓』本文に戻り、その内容を見てみましょう。春満のいう「倭学」について、ある程度書かれています。

幸に命世の才有らば、則ち尽敬王の道地に委ねず、若し啄玉の器出でば、則ち柿本氏の教再び邦に奮はん。六国史明かならば、則ち豈翅官家化民の小補

のみならんや。三代格起らば、則ち抑々亦国祚悠久の大益ならん哉。万葉集は国風の純粹、学ばば則ち面牆の譏なからん。古今集は歌詠の精選、知らずんば則ち無言の誠有らん。

まず、「尽敬王の道」の尽敬王は、舍人親王の事であり、即ち舍人親王の道とは、『日本書紀』、特に神代巻を指します。春満が大事にしたのは道の学問であり、現在の日本書紀研究では否定されていますが、日本の道というものは、舍人親王が『日本書紀』を編纂することで示したと春満は考えていました。「柿本氏の教」、これは柿本人麻呂のことで、『万葉集』を指します。基本的に春満の学問構成のメインになるのが、『日本書紀』と『万葉集』です。しかし、それだけではありません。日本の歴史、「六国史」は当然、『日本書紀』も入りますが、『続日本紀』以降の五国史も含めた国史を対象にします。「三代格」は、つまり日本の法、法制です。「古今集」とは、和歌の事です。つまり、神道、和歌(文学)、歴史、法制と凡そ区別できます。非常に幅広い、総合的な人文学とも呼べるでしょう。

『創学校啓』においては、その研究の方法論として、

国学の紕繆多き、後世猶知る者有らん。典籍猶存すればなり。古語の解釈少き、振古通ずる者を聞かず。文献足らざればなり。国学の講ぜざる、実に六百年なり。言語の積有るは、僅かに三、四人のみ。その巨擘たるも、新奇をこれ競ひ、極めて超乗なし。骨髓何ぞ望まん。古語通ぜずんば、則ち古義明かならず、古義明かならずんば、則ち古学復さず。

と、古の言葉、古語から古義、それから古学という様な学問の階梯を進めていくとしており、まさにこれが国学的な学問方法の在り方です。言葉を吟味し、その上でテキストを読んでいく。今では当たり前前の文献実証的な手法ですが、そのような方法論を提唱し、確立していったのが国学です。この「啓文」に書かれている内容というのは、春満の学問そのものといつてよいでしょう。

この文献学的な実証が、具体的にどういった成果を挙げたのか、あまり知られ

ていませんで、いくつかの例を御紹介いたします。特徴的なものをピックアップしてみました。

『先代旧事本紀』について、神道を学んでいる方は、知っているかと思いますが、中世から近世にかけて、吉田神道においては、『日本書紀』『古事記』、そして『先代旧事本紀』の三つが、『三部の本書』、所謂神道古典として尊重されていたのです。それを主張したのが、吉田兼俱以来の吉田家です。『日本書紀』『古事記』は別として、現在では『先代旧事本紀』は偽書である、という事は皆さんすでにご存じのことかと思えます。それが分かるようになったのは、徳川光圀が元禄年間に指摘してからです。但し、その認識が広まるようになったのは、それに次いで『旧事紀』を偽書と指摘した荷田春満以降である、ということなのです。通説では、多田義俊や伊勢貞丈という、有職・神道家が十八世紀半ばに『旧事紀』偽書説を主張し始めたたとされています。しかし、それ以前の享保年間に、春満は『旧事紀』というのは偽書であると、幕府書物奉行の下田師古に語っています。これには、古語に基いた実証的研究の成果が現れていると考えられます。

それから、国文学・国語学の分野で大事なものでは、歴史的仮名遣いの研究があります。中世以来の「定家仮名遣い」というものがあり、中近世の人々は歴史的仮名遣いで書いていたわけではありません。歴史的仮名遣いというのは、古の記紀万葉時代の人々が使い、そして間が空いて明治以降に教育された人が使っている、そういうものなので、その間の人々は歴史的仮名遣いを使っていません。これも専門外の方々にはあまり知られていません。中近世では、定家仮名遣いという、ちょっと変則的な仮名遣いが普通です。それが間違っていると指摘したのが契沖であり、非常に画期的な研究です。加えて契沖は、鎌倉以降の仮名遣いは誤っている、記紀万葉時代の仮名遣いはこれなんだ、と具体例を示しました。但し、これに対しては非難囂囂で、一般には受け入れられず、結局は幕末期までスタンダードな仮名遣いになることはありませんでした。契沖の示した歴史的仮名

遣いがスタンダードになるのは、明治維新以降です。

これをいち早く受け入れたのは、春満だったのです。享保の初めごろと思われるですが、春満の仮名遣いが、突然として定家仮名遣いから歴史的仮名遣いに変わっていきます。この間に契沖の仮名遣いの書である『和字正濫鈔』を読んだのは間違ありません。これは宣長などの場合でも、明和頃まで、理解してはいながら一般的な仮名遣いを使っていたのです。このように、仮名遣いを変えるというのは大変なのですが、春満は、いち早く契沖の学問が正しいと認識した人物であり、もう少し評価されても良いのではないかと思います。先述の三宅清先生の評価は、これも物真似だと断定して、低いものです。しかし、私は逆に高い評価をすべきであると考えます。真実を一人の天才が分かっているかもしれないわけで、それに対する理解者が居て、広めていくという事も大切なわけです。そういった意味で、荷田春満という人は非常に大きな役割を果たしていると言えるとと思います。

また、国史・制度の分野の研究ですが、意外とこれも認識されていません。東丸神社に残された史料を見ると、一通り六国史の注釈と講義をしています。『続日本紀』以降の「五国史」研究にも、非常に力を入れていました。これらは、『新編 荷田春満全集』第十巻に初めて載せました。それ以前の全集には、国史に関する事は載っていません。何のために、六国史を研究したかという点、おそらくは律令格式の研究のためと考えられます。当然、国史を理解していないと古代の法律は理解できません。例えば、『延喜式』で書いてあることを具体的に六国史から探していく、という実証史的な作業を行っていたわけで、史学史的にもその業績は注目されなければいけないと思います。

それから、神道に関わっては「祝詞」の研究があります。これは、先学に皇學館大学の谷省吾先生がいらっしやいます。昭和三十八年に神宮文庫の史料を用いまして、春満と養嗣子の在満が『延喜式』の祝詞研究に先鞭をつけたことを指摘されております（谷省吾「荷田春満・在満の祝詞研究と賀茂真淵」『皇學館大学紀要』

第一輯 昭和三十八年三月）。これも、それ以前は、『延喜式』の祝詞研究は賀茂真淵から始まる、というのが通説でした。谷先生の御論文が出て以降は高知大学の吉野忠先生の研究が出されまして（吉野忠「荷田在満の「祝詞式和解」について」『高知大学学術研究報告』第十四巻（人文科学 第十二号）昭和四十年）、その詳細がやっとならかなりになりました。但し、未だにその認識があまり定着していないという印象を受けます。私も大学の講義で『延喜式』の祝詞を教えています。その研究は真淵から始まる、と書かれた解説が多いのが現状です。声を大にして言いたいのですが、これは春満から始まる、が正しいのです（拙稿「荷田派の延喜式祝詞研究―稲荷祠官 大西親盛を起点にして―」『朱』第五十八号 平成二十七年二月、参照）。

最初の箇所でも申しましたが、吉宗の政策によって和古書が収集されました。吉宗という人は、実用的な人であり、思弁的な本や文芸にあまり興味はなく、実用的なものを好みました。和古書でも、法律や制度の本を政治に活かしたい、実際に活かされたかどうかは別として、「公事方御定書」というものを作りまして、現在でいう刑事・民事の訴訟の制度面での整備をしました。そのため、律令格式の研究を重視しているわけです。そこに、最初は林家が参画し、どうも駄目だという事で春満に代わっていきます。春満の学問は、基盤はしっかりとありますが、それを発展し、広めて行く原動力は、徳川吉宗の諸政策に非常に関わりがあると思われるのです。

『古事記』研究も、殆ど言及がなかった分野であり、『古事記』研究は宣長だ、というのが通説でしょう。賀茂真淵が、松坂で、『古事記』を研究したいのだが、年を取ってしまったので宣長に頼む』と言った、という有名な話（松坂の一夜）があります。殆どそれが定説化しているわけですが、『古事記』研究についても、春満が先鞭をつけています。これも幕府からの依頼が発端であり、先述した下田師古という人物が享保九年から十年の間に、『古事記』に読み仮名と注を付けてくれ、と依頼をしました。それに答えたのが発端です。その過程で、研究が深まっ

ていき、門人に『古事記』を教え、門人の筆記した講義録が残っています（『古事記割記』、官幣大社稲荷神社編『荷田全集』第六巻 吉川弘文館 昭和六年 所収）。『古事記』研究は、まずは「読み」からです。内容云々よりも、全て漢字で表記された本文をどう読むのか、という事がスタートであり、又ゴールでもあります。研究の過程で、その読み方を本に書き込みます。その書き込まれた本が、いろいろな所に現存しています。國學院大學の図書館にも武田祐吉博士旧蔵本が一本残っていますし、東丸神社にも、門人の稲荷祠官の大西親盛が筆写した一本が残っています。また、豊橋の宣長門人鈴木梁満の本も奈良県の龍門文庫に所蔵されています。どうも、浜松にもあったようで、もっと探せばあるのではないかと思います（中村啓信『荷田春満書入古事記とその研究』高科書店、平成四年、参照）。真淵も春満の訓が書き込まれた古事記から研究をはじめ、それを深めて宣長にうけ継いで行く。すなわち、国学における『古事記』研究のスタートは、荷田春満にあるという事です（拙稿「前期国学の古事記研究―荷田春満の古事記注釈書と書入れ本について―」國學院大學二二世紀研究教育計画委員会研究事業「『古事記』の学際的・国際的研究」成果報告論集『古事記学』第一号 平成二十七年三月参照）。これも意外と知られていません。

三宅清先生は春満の学問は、オリジナリティがなく大した事がないと仰いましたが、実際の春満の学問活動を見ますと、完成はしていませんが、いち早く着手した分野は多くあります。それらが、後の門人たちによって花開いていく、という事が実はいえるのではないかと思います。

次に、「幕府御用」と並行した若手門人への教授・育成の開始について述べたいと思います。春満は幕府の諮問を受けて、古書に注釈をしていきます。それと同時に並行的に、享保十年前後以降と思われませんが、春満は特に神職子弟を中心に、若者に対して講義をしました。いろいろな資料を見ますと、大体幕府の御用を受けた時期と重なります。春満は「学文所」と言っていますが、これは特別な「学

文所」があったわけでは無く、現存する春満旧邸で教えていたと思われる。場所は、京都伏見の東丸神社に隣接しており、現在でも旧邸は特別公開の際などに見ることが出来ます。

メンバーはいろいろ居まして、一人は、江戸の神田明神の芝崎主税という人がいます。近世では芝崎家が神主職を世襲していました。【写真4】に同社の境内には、江戸の国学発祥の地という碑が建っていました、これは芝崎主税の父、好高が、江戸に下った春満の最初の門人になった事に由来します。神田明神を中心に国学を教えたため、同社が国学発祥の地となっているわけです。浜松の諏訪社の杉浦朋理・国満も教え子です。戦後、諏訪神社は合併いたしましたし、現在は五社・諏訪神社となっています。これも、父国頭が門人であった事に由来しています。その他に、浜松五社の森民部、筑前国直方多賀社の青山敏文などの神職がいます。若しくは、彼らの寄宿した屋敷を「学文所」と称していたとも考えられます。賀茂真淵は、享保十八年に上京しますが、どうやら師範的な役割を果たしています。この時真淵は三十代後半でした。何をしていたかという点、例えば『百人一首』の講義を行ったりしていました。春満は、このように享保十年代、幕府の御用と若手神職養成を同時並行に行っていたと考えられます。

『創学校啓』は通説では、享保十三年に幕府に上申されたと言われています。ちょうどその頃の時期は、いろいろな調査や若手の育成を行っていた頃にあたります。『創学校啓』自体が、偽作だという説もあります。三宅先生が強く主張され、それを支持する方もいらつしゃいますが、私は享保十年代の春満の動向を鑑みるに、京都に「倭学」の学校を作ろうという春満の意思は確かにあった、と関連資料を見てそのように推定しています。当時、江戸と大坂において、幕府の援助を受けた民間の学校が開設されたのですが、それらの動向を春満は門人を通じて入手しているのです。おそらくは、享保十年から十二年の間に、春満は学校を幕府の援助を得て作ろうと構想し、それが、啓文の内容に強く反映されているのだと、

私は確信しております（拙稿『創学校啓』の近現代研究史―偽造説をめぐって―）
 『神社新報』平成二十六年十二月一日、八日、十五・二十二日号に掲載を参照。

【写真4】



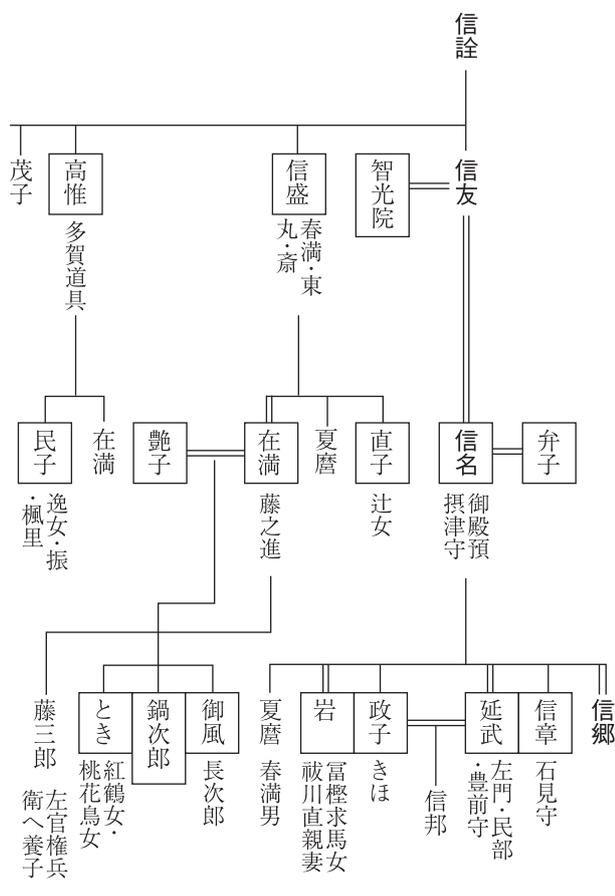
四 荷田学の系譜

春満の学問は、養子の在満が後を継ぎます。系譜（図参照）を御覧になられたら分かりやすいかと思いますが、信詮、信友、信名が東羽倉家の神職を継いだ系統で、信詮の次男であった春満は継ぎませんでした。因みに春満の本名は信盛です。信盛の下に在満とあり、本来は甥にあたります。実子には夏磨という子が居ましたが、夭折しております。この在満という人物は、先ほどの「学文所」で享

荷田春満と「荷田派」の国学者（松本）

保十二、三年には『令集解』などを若手に講義する役割を与えられています。春満は後継として育てようとしていたわけです。

【東羽倉家系譜】（平成二十二年度～平成二十五年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書『近世における前期国学の総合的研究』平成二十六年度國學院大學文学部 より）



在満は享保十三年に江戸に下ります。「東丸子分にて学問筋の儀に付、関東へ願之義有之」（荷田信名筆「家記」東丸神社蔵 『神道大系論説編二十三 復古神道（一）』）とあります。「願之義有之」とあるので、どうもこれを捉まえて、幕府へ『創学校啓』を上申したのではないか、という説があり、その可能性もありますが、主たる目的は在満が幕府に仕官することにあつたと考えられています。
 結局、江戸で在満は幕府ではなく、田安家の「和学御用」という役職に就きます。しかし、田安家は「御三卿」の一つですので、幕府とは密接な関係がありま

した。そこで、具体的には律令を中心とした日本の法制度史の研究を行っていきます。この在満の研究は、「六国史」を利用して、律令の制定過程を考究していることとする彼の態度は、令条の注解のみを以て、足れりとしていた従前の律令学の安易な学風を打破する斬新なものであったということが出来よう」と、法制史研究の祖として評価されています（利光三津夫『律令制の研究』慶應義塾大学法学研究會、昭和五十六年、二〇〇頁）。

在満の仕事として、非常に有名なのが「大嘗会（大嘗祭）」の研究です。貞享四年、東山天皇の時に二百数十年ぶりの大嘗祭が行われますが、次代には実施されませんでした。一代において、元文の桜町天皇の時に大嘗祭が行われ、それ以来、現在まで継続しています。大嘗祭を幕府が調査をした時、派遣されたのが在満でした。大嘗祭自体は、実父の死去により喪に服していたため参観できませんでしたが、大嘗祭の様子を調査して作られたのが、『大嘗会儀式具釈』です。これを幕府に上申し、『大嘗会便蒙』というダイジェスト版を刊行しました。中身は、大嘗宮についてや装束などが記されてきます。しかし、朝廷は非常に怒ってしまいます。朝廷の重要な儀式を無断で公表することはけしからん、となったわけです。これで在満は御咎めを受け、閉門蟄居という事になり、『大嘗会便蒙』自体も出版差し止め、という事態になりました。しかし、この本は写本として結構出回っており、近世後期に大嘗祭について研究する時は用いられていました。これも恐らくは、徳川吉宗の政策の中で、大嘗祭再興という問題を考えると、国家的な儀礼の再構築、例えば、途絶えていた日光東照宮への將軍社參の復活など、近世は儀式儀礼そのものが政治的な性質を帯びますので、そういったものを整備する事を構想、実施したわけです。その流れの中で在満も登用され、仕事を与えられたのだと窺われます。大嘗祭再興は行き当たりばったりの思い付きでは無く、かなり吉宗自身も周到に考慮した政策であると考えられています。このように、学問の動きや流れというものは、歴史の中に差し戻して考えなければいけません。

【写真5】



次に、【写真5】は浅草の金竜寺にあるお墓です。三基並んでいますが、真ん中が在満、右が在満の子の御風、左が民子（蒼生子）のお墓です。民子は荷田春満の姪で、在満の妹にあたります。国学史を概説的に説明すると、春満の学問は在満で終わりなのですが、実はそれで終わりではありません。通説的には、在満が『大嘗会便蒙』で御咎めを受け、賀茂真淵の時代が来たのだ、ということになり、春満の流れはそのまま真淵に行く、となってしまいますが、実際はそうでは無いのだろうと思います。

「角田川扇合」という、文人たちの雅会があります。隅（角）田川のほとりの寺で和歌を詠み合い、その良し悪しや、作った扇も比べ合うという風雅な遊びです。この様子が出版され、江戸の文人たちに持て囃されました。その雅会に参加しているメンバーが、「江戸荷田派」とでもいうべき人々なのです。これは、安永八年に行われましたから、既に約十年くらい前に賀茂真淵は亡くなっています。雅会のメンバーには民子や在満、御風の関係者たちが相当数いる事を、既に丸山季夫先生が指摘されています（丸山季夫「三島自寛と角田川扇合」『国語と国文学』四五―七、昭和四十三年十月）。メンバーは大名、旗本や国学者などの人々

で、最近では、盛田帝子先生が研究され（盛田帝子『近世雅文壇の研究』汲古書院、平成二十五年）、このように同時代史料を丹念に分析することで、真淵没後も、荷田派というのは非常に勢力があったという事が、だんだん明らかになってきたようであります。

一方、京阪の荷田派についてですが、系譜を見ていただければ、東羽倉本家を継いだ信郷という人物がいますが、かなりの文人であったという事も分かつてきています。寛政十年に『創学校啓』が収録された春満の歌集である、『春葉集』が刊行されますが、それにあたつての信郷の影響は大きかったと考えられます。先述の伴蒿蹊『近世崎人伝』の中で「国学」という言葉が用いられている事を指摘しましたが、信郷は『国事八論』という著述で、「国学」という言葉を用いており、春満の情報が、京阪の文人サークルの中へ信郷から流れていたのではないかと考えられます。その情報をもとに、伴蒿蹊が『近世崎人伝』を書いたり、先述した龍公美などは、荷田春満の『伊勢物語』を読んでいるので、そういった資料を信郷が貸し出しているようです。他にも、梅宮の神主で国学者の橋本経亮など、京都周辺の文人と信郷は、かなりの付き合いがあります。彼らの中で、荷田春満という人が十分に認識されていたという事です。これらについては、近年、慶應大学斯道文庫の一戸渉先生が指摘されています（一戸渉『上田秋成の時代』ペリカン社、平成二十四年参照）。

おわりに

簡単に総括しますが、まとめとしてはいくつかあります。その内の一つが、『創学校啓』の内容を再度吟味して見る必要性があるという事です。意外と読み飛ばしてしまう事が多くて、一種のレトリックだと思われがちな箇所も、実は精読すると、その当時の吉宗政権が何を考え何を実行していたのか、それに学者がどの

ように参画していったのが窺い知れます。皇學館大学の学長を務められた大庭脩先生が、吉宗の漢籍輸入については研究されていますが（大庭脩『徳川吉宗と康熙帝』大修館書店、平成十一年参照）、まさにそれまで含めた中で「国学」が発生してくるという意味を、近世中期という時代に何故出てきたのかも含めてもう一回、虚心坦懐に考えてみる必要があります。それを踏まえた上で、複線的に学統というものを理解していかなければ、「国学」というバラエティに富んだ学問が理解できないと思います。

次に、国学の性格について、一方では風雅なもの、他方では政治的なものもある。そういった多様な日本に対する学びがあったという事を我々は理解しなければならぬと思います。「三哲」「四大人」の箇所でも言及しましたが、直線的な一つの系統の学問ではなく、複線的に様々な枝分かれをしていて、横でも絡まる、非常に複雑な形をしています。例えば「荷田派」を例にとっても、荷田春満の次は在満で終わった、という事ではなく、実はずっと続いていたのであり、これは宣長や篤胤などの全ての系統にも言える事であろうと思います。「国学」という学問自体が、総合人文学であると同時に、学統も複線的に考えなければならぬのではないかという事です。少なくとも十八世紀初頭から天明頃まで、私も学統の再構成を試みたいと思います。今までの学説史や通説的な説明だけでは物足りない。もつともつと「国学」とは面白くていろいろなことがあったんだという事を皆様方に提供出来ればと思います。

最後に、短い時間の中で、尽くせない事も多々ありましたが、国学について、皆様も少しでも興味をもって頂ければと思います。一時間半、御清聴誠に有難う御座いました。

（まつもと ひさし・國學院大學神道文化学部准教授）